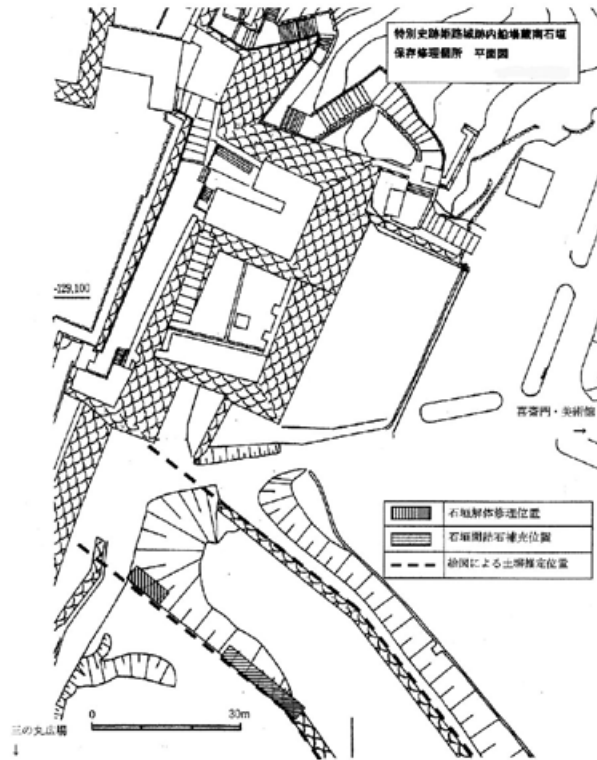


# 内船場蔵南石垣の修理工事

## 1 姫路城内船場蔵南石垣の概要

今回、石垣の解体修理を行っているのは、姫路城内曲輪東部の内堀に面した石垣の一部です。ここは、三の丸広場のある大手側と美術館方向からの搦手を分離する役割を果たしていました。池田家が城主であった時代の絵図にはすでに描かれており、江戸時代初期には存在していました。絵図によると江戸時代には石垣上に土塀があり、上山里丸下の石垣ぎわまで延びていたようです。

姫路城の石垣は、築かれた時代別にⅠ～Ⅴ期に分類されます。16世紀末頃に羽柴秀吉が築いたのがⅠ期で、自然石を積み上げた野面積（のづらづみ）。関ヶ原合戦後に播磨に入封した池田輝政によって慶長6年（1601）頃から築かれたのがⅡ期で、矢と呼ばれる楔で割った石を積んだ打ち込みハギです。この石垣は凝灰岩（ぎょうかいがん）を主に使用した打ち込みハギで、池田時代のⅡ期に積まれたとされています。



## 2 石垣保存修理工事の概要

城郭研究室では平成28年（2016）度に引き続き、内船場蔵南石垣保存修理を行っています。姫路市では平成2年度から、継続的に石垣修理を行ってきました（平成10～14と19年度は未実施）。平成29年度は、樹木の根の影響により石垣に孕み出しが生じた箇所の石垣解体修理と、昨年度修理範囲の続きで、脱落していた間詰石の補充を行っています。

- ・石垣修理工事期間 平成28年12月25日～平成30年3月16日
- ・修理対象石垣面積
  - ①石垣の解体・積み直し 立面積 6㎡  
樹木の根の影響により孕んだ石垣の解体と根の撤去、石垣積み上げ。
  - ②間詰石補充 立面積 88㎡

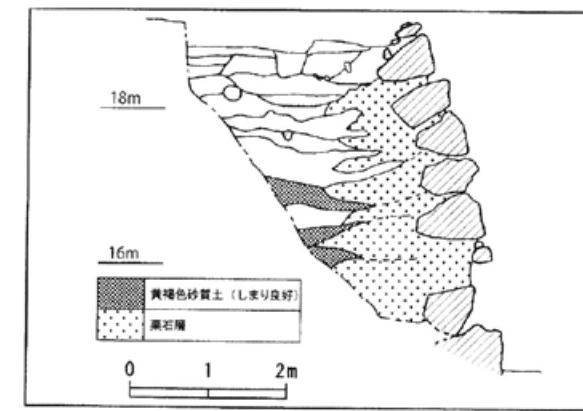
## 3 石垣修理でわかったこと

石垣を解体したところ、解体した範囲では、裏込の栗石層の幅が30cm以下で一部途

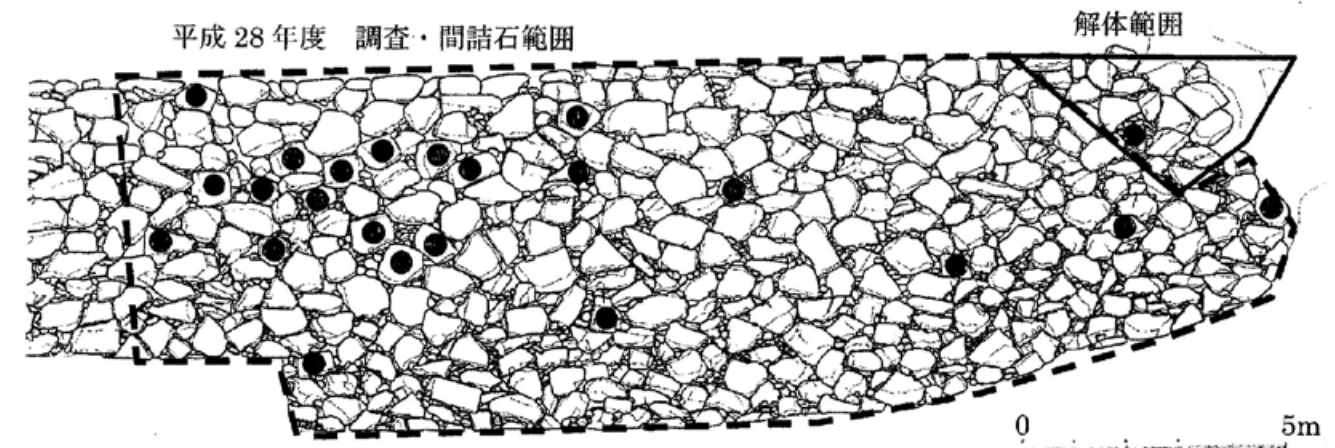
切れているところもありました。平均50cmから1m程は厚みがある姫路城の他の石垣よりもやや狭いようです。ただ、今回の解体修理箇所より下では、栗石層の幅も広くなるようです。

栗石層は石垣内部の排水機能を高め、緩衝材としての役割を果たすものですが、姫路城内でも場所により石垣施工の状況に差があったこととなります。

このような差が出た理由は不明ですが、表面の石垣石材に姫路城ではあまり使用しない花崗岩がほかよりも多く混じっていることから、江戸時代後半以後に積み直しが行われた。あるいは、石垣を積んだ技術者が異なっていた。または、石垣上にある櫓などの重要建物の有無により石垣の施工方法に差を持たせたなど、いくつかの可能性が考えられます。城郭研究室では、これから今回の調査の成果の分析に取り組んでいき、文化財としての石垣保存に活かしていきます。



石垣の断面図（清水門内門西側）



内船場蔵南石垣〔南側〕立面図

●花崗岩系石材



間詰石補充作業前の状況



木の根の撤去と石垣の解体（栗石の状況）